

方言と共通語

——中国における共通語普及運動——

彭偉文*

一. はじめに

日本には、石川啄木のこういう短歌がある：

ふるさとの なまりなつかし
駐車場の ひとごみの中に
それを 聞きに行く¹⁾

中国には、賀知章の「回郷偶書」というほぼ誰でも知っている詩がある：

少小离家老大回，(若い頃ふるさとを離れ、
年老いた時帰り、
乡音无改鬓毛衰。なまりは変わらず、髪は
白くなった。
儿童相见不相识、小さい子供は、僕を知ら
なく、
笑问客从何处来。「どこからの来客だか。」
と微笑んで聞いた。)

二つとも、とても感動させる文学作品だ。自分のふるさとの方言への愛着を持っているのは、人間の常情であろう。生まれ育った土地に暮らしている人にとって、これは親しいものだが、ふるさとを離れた人にとって、懐かしい故郷の一つの標識である。しかし、方言というのは、親しく、懐かしいものだけではない。方言は、民族の言語の一部であり、その土地の文化と深いつながりがあるので、文化の載せるものの一つである。地方の人々は、毎日自分の方言で話しており、考えており、交流しており、微妙な文化の感覚を伝承している。地方の文芸は、
※神奈川大学歴史民俗資料科学研究科研究生

ほとんど方言に依存している。だから、さまざまな方言は、多彩な文化を示しているのである。文化が相変わったと、方言も相応に相変わるわけだ。逆に、方言は破壊されたら、文化の一部も消失してしまうだろう。

上述は、方言の一方だ、もう一方は、不便利なものである。同じ民族の人でも、違う方言を話したら、話し合えないこともあるのだ。交流のために、別の方言を学ぶのは、当然なことだろう。これは自然な状態だ。もし民族は国家または国家の一部になったら、さまざまな目的のために、共通語というものが国家の名義で指定されることも当然であろう。いまの中国も例外ではない、普通話という共通語を指定した。中国には、56の民族がいる。このなかで、漢族・回族・満族は漢語を話し、ほかの民族は自分の言語を使っている。漢族の人口は、中国人口の95%以上であり、実際の国家政権を持っているので、普通話は、もちろん漢語だ。領域が広く、民族が多い中国にとって、みんなが話せる共通語は、必要に間違いはないだろう。ただし、普通話と別の民族の言語の間には、どんな関係があるのか。普通話と方言の間には、どんな関係があるのか。ここから、問題が起こった。別の民族は、自分の言葉を話しながら、漢語の普通話を学ぶことはその民族の文化に影響を与えるのは、確実だ。それでは、漢語を話している漢族人の内部には問題もあるか。答えはイエスである。実は、漢族人にとって、普通話を推し広めるのも文化の意味深いことである。

二. 漢族と漢語の方言

漢族は、世界一大きな民族の一つと言える。

人口が一番多く、歴史は本当に長い、しかも、4000年以上のとぎれない文明を持っているのである。漢語の文字は、殷代（約紀元前17世紀～紀元前11世紀）に創造された甲骨文から発展しつつめた。約紀元前220年ごろ、漢語の書き方は統一されてから、19世紀末まで、全体の漢族人はこの「文言文」*という書き方で、漢族の輝かしい文化を記録しており、伝承してきた。しかし、これは文章語で、口頭語とずいぶん違うのである。漢族は、昔から「書同文、語不同音（書き方は同じ、話し方は同じでない）」の民族と言われており、非常に複雑な方言情況を持っている。現在の漢語は、言語学の分類方法によって、七つの方言に分けられている。まず、簡単に説明したい。

1, 官話方言

北方方言とも呼ばれており、代表的な方言は北京方言だ。これは、漢語の一番大きな方言であり、話している人口は漢族の人口の70%以上である。官話という方言は、発音によって、主に四つに分けられている：

(1).華北官話

主に北京市・山東省・河南省・東北地方に分布している。華北官話は、モンゴル語・もとの満族語・昔の契丹（チタン）族の言語などの元素が漢語に入ってきた結果であり、清朝の初期（17世紀後半）に形成した最も新しい方言だ。だから、この方言と古漢語との間には、一番大きな格差がある。これは、今の普通話の基礎方言である。

(2).西北官話

西北地方にいる漢族人と回族人の話している方言である。

(3).西南官話

四川省・雲南省・貴州省・広西壮（チワン）族自治区の北部・湖南省の大部に分布している方言である。

(4).江淮官話

江蘇省の揚州・南京・塩城・鎮江などの地方に分布している方言である。

2, 吳語方言

漢語の二番目の大きな方言であり、主に江蘇省の南部・浙江省・上海市の人々の話している方言である。この地方は、ずっと昔から発達した文化を持ってきたから、吳語方言は古漢語と深い関係があり、言葉も発音もとっても優雅だ。

3, 粵（ユエ）語方言

三位を占めている方言であり、広府話・白話とも呼ばれている。主に広東省の中南部・西部・香港・マカオ・広西壮族自治区の東南部に流行している。海外、特にアメリカ・オーストラリア・東南アジアに居留している華僑は、ほとんど粵語方言をはなしている。粵語方言は、消失した越（ユエ）族の言語を古漢語に混じった結果だ。

4, 閩（ミン）語方言

閩は、福建省の略称だ。閩語方言は、閩北方言と閩南方言に分けられている、主に福建省に分布している。このほか、台湾省・海南省・広東省の東南部と西南部にも、閩南方言を話している人がいる。

5, 湘語方言

湖南省の本来の方言である。いまは、湘語方言を使っている人は少なくなっており、主に湖南省の南部の山地に暮らしている。

6, 贛語方言

江西省の主要な方言である。

7, 客家（ハッカ）方言

中国の客家人という人は、広東・福建・江西三省の連接地域にいる北方からの移民である。客家方言は、唐代以前の北方方言の数多くの特徴を保有している。

以上は、漢語の方言のおおよその情況だ。これらの方言は、互いに大きな格差があるほか、一つの方言のなかに、いろんな次方言がある。方言と方言の間に、発音はもちろん違うが、語彙・文法もいろんな差別がある。なぜ漢語の方言はそんなに複雑なか。何千年以来、漢語は、自分で相変りながら、別の民族の言語の元素

を続けざまに吸収したから。言語の同じように、今の漢族人は、純粋な「漢人」ではない。実は、西周時代（約紀元前11世紀～紀元前771年）から、純粋な「漢人」という人間はなくなってきた。現在の漢族人は、さまざまな民族の混合した結果である。これは、漢語の方言の来た道の一つだ。もう一つは歴史上の漢族人のたびたび大仕掛けに移転したことだ。中国の南にある広東省は一つの典型的な例である。

方言情況において、広東省は中国においても最も複雑な一つである。いまの広東省にいる人は、来た道によって、広府・客家・福佬という三つの民系に分けられ、対応して、粵語方言・客家方言・閩南方言という三つの方言を話している。広府人は話している粵語方言は、このなかの一番主要なひとつであり、代表的なのは省会としての広州市の方言だ。粵語方言は漢語と別の民族の言語の混合物であり、長い歴史を持ってきた。いまの広東省というエリアは、もともと越族という民族の支系である「南越」の人々の暮らしている地域で、漢族人が全然いなかった。さらに、この地域は、元の漢族人がいた中原と、南嶺といふ山脈で仕切られているゆえに、嶺南と呼ばれており、当時の漢族人にとって、とても辺鄙な所だった。漢族人はいつから嶺南に入ったのを、今はだれでも確かに知らない。史料によって、始めての大量の漢族人が嶺南に漢語をもって移転したのは、約紀元前220年ごろのことだった。当時、秦始皇の中国を統一した軍団の軍士としての漢族人は、嶺南を占領し守るようになり、今の広州市と周辺地域（広府地区と言われている）に定住した。これは、嶺南という地域は中国の中央政権に統治されることの初めだった。これから、元住民である南越人は、どんどん変化しつつも、一部は漢族人に同化されてしまい、ほかの一部はいまの壮族・黎（レイ）族などの民族となった。この間に、漢族人は南越語の元素をもらい、苗族・瑶族・僚族^⑧などの周りの民族の言葉を学んだとともに、粵語という自分の方言を始めた。

後の千年余りの間に、戦争などの原因で、北方からの漢族人は続々と自分の言葉を持って南下し、初期の粵語方言と入り交じり、宋代まで熟した粵語方言は形成した。

客家方言を話している客家人は、約四～五世紀ごろに中原からの移民の後代である。広東省にいる客家人は、主に東北部の山地に集まって住んでいる。「客家」という名が示すように、到着したばかりころ、あの人たちは地元の元住民に対して「客」であった。客家人南下の初めは、「五胡乱華」という北方の遊牧民族は中原を占領した歴史事件の結果だった。以後、同じような原因で、もう二回の大仕掛けの南下があった。客家人南下の動機は、主に異族の統治から被害を避けることであった。もう一つは、当時の南下した客家人のなかに、貴族である人は多く、純粋な漢族人の自負感は強かったので、外族統治者に対する強い抵抗意識を抱いていたことだった。だから、南下した後、伝来の文化を保持するため、「勿忘祖宗言（祖先の言葉を忘れるな）」という訓令は、代々伝わってきた。そして、客家人は辺鄙な山地に定住し、周辺との交流は少なかった。いろいろな原因のために、本来の言葉は大量に保存し、元住民の言葉を少し吸収し、明代ごろに今の客家方言は形成してしまった。

もう一つの民系は福佬として、唐代から福建省より西へ遷移してきた人々の後代であり、今の広東省の東南部と西南部に住んでおり、閩南方言を話している。閩南方言は、上古の呉語と越族の一つの支系の言葉の混合物である。広東省の東南部の「潮汕地区」にいる福佬人の言葉は、「潮汕方言」とも言われており、福建省の閩南方言とほとんど同じである。広東省の西南部の「雷州半島」という地域の方言は、閩南方言の次方言の一つであり、「雷州方言」と呼ばれており、福建省の閩南方言とはある程度の差別がある。雷州方言は、閩南方言と雷州半島の元住民の俚族人^⑨の言葉の混合物であり、「黎話」とも言われている。

そんなに複雑な漢語の方言もあり、いろんな民族の言語もあり、中国には、交流工具としての共通語は必要なものであろう。それで、清朝から、政府はもうこの問題に注目し始まった。

三、失敗した官話と国語を押し広めたこと

官話ということは、本当な共通語ではなく、官辺の公務用語であり、民間の言葉に対して「官家話」・「官音」とも呼ばれている。「官話」が名として、いつから使用されたか、いま確実な見解がない。現在の官話は、特に清朝の官辺の言い方を指し、実際是北京方言である。

清朝は、満族という少数民族に統治され、いまの中華人民共和国より広い領域を持っている皇朝であった。少数民族は広大な中国の国土を全て持ち、人口が多い漢族を成功に統治したことは、清朝しかないと言っていい。満族は暴力で漢族を征服した後、漢族の文化をまじめに学び、漢族人を任用し、有効的な政府機構を建てた。四代目の皇帝である康熙皇帝のころから、社会は安定になり、経済は速く発展しており、数多くのさまざまな方言を話している漢族人は重要な官職を担当していた。漢語の方言の中に、粵語方言と閩語方言は別の方言より官話と大きな違いがある。当時の北京で仕事をしている官員のうち、広東と福建からの官話と全然違う言葉を話している人々は珍しくなく、皇帝と彼らの交流は大変であり、両方とも本当に困っているようであった。そして、清朝の政策によって、地方の官員は必ず別の地方に生まれた人が担当するので、方言はもっと大きな問題になったようだった。五代目の雍正帝は、もう我慢できなくなったように、「凡官員有莅民之責，其言語必使从共曉，……惟有閩、廣兩省之人，仍系多音，不可通曉。（官員のみんなは、人民を管理する責任を持っているので、言語は必ず互いに分かる、……福建と広東からの官員だけは、まだ自分の方言を話している、別の地域の人に分かってもらうのができない。）」^⑩と譴責し、「諭閩廣正多音（福建と広東の人々にな

まりを直させ）」という命令を下した。しかも、雍正帝は、なまりを直すように、子供ころから官話を学ばなければならないことがよく分かっており、「正音書院」を建て、「应令福建、广东两省督撫，转諭所属各府州县有司及教官，遍为传示，多方训导，务使语言明白，使人通晓，不得仍前习为多音……（福建と広東の両省の督撫^⑪は必ず各府・州・県の有司及び教官^⑫にこの命令を伝い，[人民に]広く知らせ，[有司及び教官は必ず人民に]さまざまな方法で[官話を]教え，分からせ，別の地域にいる人に了解してもらえるようにする。本来の方言を話すことは厳禁される。）」^⑬という政策を制定し，碑を作り，広東の新安故城^⑭に立てた。これは，中国史上初めての官話は公務用語の範囲を乗り越えら，別の方言区に押し広めることであった。しかし，雍正帝の希望は当てが外れた。普通な広東と福建の人々は，自分の方言を話したままのうへ，皇帝の命令が全然知らなかったのである。政治から見れば，失敗の原因は，命令ばかりをしたが，有効な機構が設立されなかったことだろう。当時の中国では，教育のことは宗族に担当されていた。祖先を祭祀している所としての祠堂が，学校の場所とも使われており，学校教育と家庭教育ははっきり分離されていなかった。有司と教官は教育を担当する官員であったけれども，主に科挙のことを管理していただけ，具体的な教学のことにあまり口出しをしていなかった。科挙の内容は，千年余り以来全く「四書五経」からの文章語であり，言語の話し方には関係がぜんぜんなかった。これは，全部の原因だか。本当の原因だか。清末からの再びの共通語押し広める運動をみてみよう。

20世紀の初めは，中国にとって画期的なころであった。当時，この古老な，思いあがる帝國は，強大な外敵からの圧力を当たっていたので，突然なように自分の落伍を意識し，西洋からの新しい科学技術を学ぶことが始まった。国家を強めるように，教育の改革をも始めた。この前，清朝の満族統治者は，漢族の伝統文化を守

る気持ちがとても強く、学校は全て「四書五経」などの漢族の古代経典を教えており、科挙で官員を選抜していた。いまからちょうど100年前の1902年、「钦定学堂章程」を公布施行したことは、中国での現代教育体制の初めと認められている。これから、中国には完備な学校体系があるようになり、授業の内容も文学・算学・物理・化学などの現代学科になった。この『章程』によって、師範学堂・中学校・小学校で「官話」という授業を「中国文」科に入れられ、会話と聴力を主とし、全国で口頭語を統一することを目指した。「官話」の授業は週に一回であり、教科書は、北京方言で書いた「聖諭広訓」という皇帝の語録であった。⁹¹『章程』には、「官話」授業の目的において、明確的に「茲擬以官音统一天下之语言。(これから、官音で全国の言語を統一しよう。)」・「使习通行之官话,期于全国语言统一,民志因之团结。([学生]に通用している官音を学ばせ、全国の言語を統一することを期待し、人民の意志をこれによって団結にしよう。)」と書いた。⁹²これから1912年までの10年間、「钦定学堂章程」とその付属文書は、すつと実行していた。

1912年、中華民国は清朝を代わり、中国は帝国から「現代国民国家」というものになった。まもなく「新文化運動」という文化改革の努力は始まり、1919年の「五四運動」まで高潮になった。この運動は、陳独秀・胡適・魯迅などの数多くの巨匠である人々に指導され、中国文化に民主と科学の精神をいれ、本当の近代化を始まらせた。文学の改革はこの運動の標示的なことであり、漢語の書き方は文言文から白話文になり、共通語を制定することも始まった。1913年、全国で漢語の発音を統一するゆえに、「統一読音会」は開かれ、当時の有名な言語学家・文学家である呉稚暉・馬裕藻・魯迅などに主事され、「旧国音」⁹³という国音を制定し、漢字による「注音字母」を作った。これは、民国時期の共通語制定することの初めであった。これから中華人民共和国の成立まで、共通語の制定と

普及の努力は、以下のとおりである：

1918年、「注音字母」が公布された；
1919年、「国音字典」が初めてに刊行された。同年、国語統一籌備会が設立された。
1920年、小学校の「国文」科は「国語」に改め、書き方は「語文体」になり、「国音」という発音を作った；⁹⁴
1921年、「国音字典」が国語統一籌備会に改定され、「教育部公布校改国音字典」で再刊行された；
1923年、国語統一籌備会に付属する国音字典増修委員会が設立され、「国音字典」の内容を増加、改定した；
1928年、国音の注音する方法は、注音字母からローマ字母になった；
1932年、「国音常用字彙」が完成され、教育部に公布され、「新国音」という国音の標準は明確的に北京語に決まった。

いろんな工夫をしたといわなければならないであろう。それでは、効用はあったかなかったか。以下の文章から見よう：

ぼくは上海へ行ったのは、中学校の進学試験を受けた為であった。……余姚は上海から遠くないけれど、余姚語は上海語とずいぶん違う。ぼくは、余姚語しか話せない人はきくと上海の街頭に完全的に困るだろうと思っている。……上海に着いたあと、(ぼくは)ほとんど周りの人と言語で交流できなかった。終日気がふさいで晴々しなかった。……最も悲しいのは中学校に入ったあと第一日のことであった。生憎に、先生はぼくに問題を立ち答えることを要求した。ぼくの顔が赤らみ、言葉かずと詰まり、ついに全部余姚語ではじけるように言い出した。ぼくはあの時、先生と同学たちがきくと本当に迷い、ぼくの話がぜんぜん解らなかつたのだらうと思っている。⁹⁵

これは、1946年浙江省余姚県⁹⁶に生まれ、中

国の有名な作家としての余秋雨の『郷関何処(故郷はどこにあらう)』という散文の一部である。1957年、余さんはふるさとを離れ、上海の中学校に入った。上記は、その時のことであった。当時の中国で都市以外の地方出身で、小学校を卒業した後さらに中学校に入る人は、よく珍しく、知識人とみなされていた。それに、余秋雨の父は、当時の中国一大きな都市である上海で働いていたので、彼が孤立な環境で育ったのが言えない。この例から見ると、当時の余姚は、まだ大きな方言問題があり、地方の人々は自分の方言だけはなしていた。余姚は、呉語方言区の浙江省にあり、昔から文明が発達した所であり、中国で尊敬される古代の思想家の王陽明と黄宗羲の故郷であった。余姚でさえそういうことがあったから、まして辺鄙な所ならまだ自分の方言しか話せなかったであろう。そんな状況を考えれば、民国時代の国語を推し広める努力も無駄だったのは、とても明らかである。

漢族は、いつも従順である民族と認められていた。これについて、こういう冗談がある：世界児童代表大会で、主事人は代表たちに、各国の食糧問題において自分の見解を発表することを請った。アフリカからの子供は、「食糧」ということが分からなく、アメリカからの子供は「各国」ということが分からなく、中国からの子供は「自分の見解」ということが分からなかったようだ。そんなに従順である民族だったら、どんな政策でも順調に施行できるのは、当然なことだろう。けれども、清朝から中華民国まで、官話から国語まで、200年くらいの間に、共通語を推し広めるのは、何度も努力をしたのに、何度も失敗の結果を得た。なぜだったか。違う視点から見よう。これらの失敗の原因は、当時の中国、確かに漢族にとって、共通語ということが必要ではなかったかもしれない。どうということなのか。

中国では、ほぼ2000年以來、儒家理論に従い、國家を統治していた。儒家理論の核心は、「礼」というものである。「礼」は、儒家にとって、

理想的な社会の秩序であり、人々は自分より地位の高い人と年上の人の見解を無条件的に賛成し、命令を無条件的に従って行うのであり、つまり、中国語で「君君臣臣、父父子子」ということである。この理論はずっと発展し、二つの結果となった：皇帝を核心としている「皇権崇拜」と宗族の祖先を核心としている「祖先崇拜」であった。いる地域は広く、人口は多い漢族人にとって、前者は精神的な存在であり、後者は実際の生活を支配するものであった。皇権ということは、中央に全国の権力を集中し、さらに統一した国家を目指しており、個人と地方の権利と意志を無視していた。当時の漢族人は、理論において、これを承認しており、「忠君愛国」と代々伝わっていた。けれども、彼らの暮らしは、皇帝とほとんど関係がなかった。中国は、秦代から封建社会という社会形態になり、自然経済という経済形態をしていた。自然経済は、家庭を生産単位とし、ほとんどの食糧などの生活必需品は自分で生産し、自分で消費することである。だから、当時の普通な漢族人は、地域に跨る協力をあまりしなく、協力意識も薄らいであった。そして、昔の漢族人の間には、こういうことわざがあった：「生不入官門、死不入地獄。(生きていころ役所に入らない、死んだあと地獄に入らない。)」普通の漢族人の生活にとって、政府より、宗族の権力はとても強かったので、一般的な社会事務は、たいてい宗族の内部で解決し、政府部門に訴えなかった。地元の人と違う地域からの官員に話し合うことは、珍しかった。だから、官話ということは、人民の生活にほとんど関係がなかったわけである。

この状況は、民国になってもあまり変わらなかった。中華民国は、現代的な「国民国家」になったと言われるけれども、国民の暮らしと経済形態は昔と同じであった。確かに、都市の状況は変わったかもしれない。しかし、漢族は農業民族であり、当時の人口の80%以上は農民であった。農民は、ほとんど国家事務の管理を参

加する権力もなく、意欲もなかったので、千年余り以来の暮らし方を続けていた。地域を跨る交流がなければ、共同の交流工具である共通語が必要ではないわけである。このうえ、民国の教育体系は現代化になったけれども、当時の中国の農民は、あまり教育を受けなかったので、国語を教えられることもなかった。だから、以上によって、こういう結論は得られた：官話と国語という共通語は、当時の漢族人にとって、使い物がなかったのだから、推し広められなかった。しかし、これは全部の原因ではない。当時の統治者は、一つの問題をおろそかにした：共通語とは、交流工具として使い物のうえ、国家の象徴のひとつである。ゆえに、当時の官話を押し広めたことが、そんなに重要なことではないと考えられた。雍正帝時代のことについて、「有司地方、皆視為不急之務、虛應故事、久且任其墮廢（有司と地方の官員は、[官話を教えることは] 不重要なことと認めており、いい加減にしていた。さらに、月日の経つにつれて、[有司と地方の官員は正音書院の] 棄てておいたものになってきたことを無視にした。）」[※]という記録がある。「欽定学堂章程」には、「(学生)に通用している官音を学ばせ、全国の言語を統一することを期待し、人民の意志はこれによって団結にしよう。」と書いたけれども、実際の工夫は足らなかった。中華人民共和国の普通話という共通語の推し広める運動を考えると、この問題がもっとわかりやすくなる。

四、いままでの普通話推し広めること

1949年、中華人民共和国が成立し、中国は社会主義国家という国になった。1951年、当時の国家主席の毛沢東は、「文字は必ず改革しなければならない。また、世界共通の文字の表音化に向かわねばならない」[※]と指示した。漢字は、発明したときから表意文字であるが、表音化したかかったら、全国中漢字の発音を統一しなければならないものである。そのまえ、西洋文明を学び、「旧文化」と言われていた伝統文化を

すべて捨てる思想に影響されていた故に、1934年漢字ラテン化によって漢字表音化の運動もあった。「新文化運動」の参加者であった毛沢東の指示は、「漢字ラテン化」という思想を継承していたのであろう。ほかに、これより重要な目的もあった。

中華人民共和国は、現代国民国家という国家である。「国民国家」は、想像されたものである。普通の人にとって、「国民」というのも、想像された概念である。この概念を成立させるため、いろんな限界を設定しなければならない。最も直接的な限界は、もちろん国境と公民身分だ。しかし、これらは、外在の限界だけだ。内在の限界は心に影響を与えるので、外在より重要なことだろう。この限界は、文化の帰属感というものである。全国で最高な統治者である毛沢東への個人崇拜を作ったとか、共産党についての昔話や映画を流れさせたとか、共産主義の未来を描いたとか、ぜんぶは文化の帰属感を作る役割を果たしていた。広い領域に住んでおり、多彩な文化を持っており、人口は圧倒的な優勢を占めている漢族において、文化の帰属感を作るため、「地方主義」という地方文化への感情を批判し、統一の文化精神の象徴を立つのは、必要であろう。共通語である普通話とは、象徴の一つとして、政権を持っている人たちにとって、普及するのは当然な任務である。

当時、初めて政権を持った共産党は、国際の外務問題も国内の民族問題も直面しており、共産主義の理想を早く叶うのを期待しており、政権を固めてほしかったゆえ、いろんな努力をしていた。言語と文字の改革は、もちろん重要なことと認められていた。1949年建国したばかりのときから、言語を統一する工夫が始まった。1949年10月10日、中国文字改革協会は北京で成立した。これから3年間、この協会の主な任務は漢語読音方案に関する研究を組織することであった。1952年2月、中国文字改革研究委員会は成立し、どんどん漢語読音を制定するを行っていた。1956年2月2日、中央推广普通話

工作委員会の成立したことが発表され、4日後、『國務院関于推广普通話的指示』という建国後の初めの共通語を普及する命令が公布された。この命令には、時代の特色があり、「言語は、交際工具でありながら、社会闘争と発展の工具でもある」と書いてあった。「歴史的な原因がゆえに、漢語の発展は、まだ完全に統一のほどにならない。数多くの重大に相違している方言は、遠い地域にいる人々の話し合うのを妨げており、社会主義の建設事業に不便利をもたらしている。……わが国の政治・経済・文化及び国防の一層発展する利益のために、これらの現象は有効的に取り除かなければならない。」と原因と目的を説明した。共通語の内容と推し広める方法について、こういた：「漢語を統一する基礎はもう存在している。これは北京語の発音を標準音とし、北方話を基礎方言とし、模範的な現代白話文の著作を文法の規範とする普通話である。教育系統中と人民の生活の各方面にこの普通話を推し広めるのは、漢語を全く統一する主な方法である。」この指示は、明確に漢語を全て統一する目的を提出し、具体的な措置を計画し、少数民族以外の中国公民を北京方言で話させる目標を目指していたものである。²⁸

1956年～1965年の間は、文字改革の高潮である時期と認められている。1958年、『漢語拼音方案』が公布された。この方案は、漢語の標準的な発音を示しており、今までずっと採用されてきた。ここまで、普通話の発音は最後に決まった。当時の中国では、文盲である人はとても多かった。漢語拼音は、これらの人の文字を学ぶことにとって、有効な補助工具であった。ほかに、漢語拼音は、普通話を普及する工具とも使われてきた。これから、普通話を普及するため、全国範囲の方言調査を行い、教材を編集し、全国普通話教学成績観摩会を何回も開催したなどの工夫をした。そんな状況は、1966年の文化大革命の起こったことのために終わった。文化大革命の前半、普通話を推し広めることは全部停止されていた。1972から、少量な漢語正音につ

いての講座はラジオで放送されてきた。けれども、これだけであった。²⁹

文化大革命の10年間は、何もなかったと認めてもいいであろう。それでは、1956年～1965年の10年間余りの普通話を普及する努力は、効果があるのか。いま有効的な資料がないので、はっきり知ることは無理である。1978年、南方方言区推广普通話座談会が開き、1982年「国家は全国で通用する普通話を推し広める。」という規定は、『中華人民共和國憲法』に入れた。³⁰ そんなに特別な工夫をしたことによって、当時の普通話を普及することはまだ有効だと言っていけなかったと考えてもいいであろう。

1978年から、中国政府は文革を全部否定し、改革開放という政策を決め、社会と経済の事務は正常化になってきた。普通話を推し広める運動ということも、これから再開された。もちろん、学校からであった。1978年8月、『学校で普通話と漢語拼音の教学を強めるについての通知』³¹が伝達された。広東省の広州市に生まれ、粵語を話している人々の中に育った筆者は、その年から小学校に入り、今でも、当時の国文の授業は拼音によって漢字の「確かな」発音を学び、「普通話で話してください。」³²と書いてあるポスターは壁に何枚も貼られてあったことをよく覚えている。当時の先生がたは、授業の内容を全て普通話で教えてくれた。そんな環境の中で勉強していた筆者は、小学校を卒業したとき、もう普通話がよくできるようになり、どんな文章でも普通話で読む習慣になった。けれども、もともとの方言としての粵語は、まだ日常用語であった。筆者の入った小学校は普通話で教学する模範学校であったので、普通な小学校の状況がよく分からない。だけど、中学校に入った後、ほかの小学校からのクラスメートも普通話が話せることを知っていた。これから見ると、広州市の小学校は、成功に普通話を学生に教えたのは、よく明らかだろう。いまの中国では、筆者と同じぐらいの歳で、高校以上の教育をもらった人々は、たいてい普通話がとても

自由に使えている。さらに、大学に入ることができた人のうちに、普通話で文章を読んでおり、仕事または学術についてのことを考えている習慣になった人々は、珍しくないのである。

学生以外の人々も、普通話を学ぶ機会が貰えた。1980年代前半から、テレビとラジオが、中国の家庭に速く入ってきた。もちろん、普通話で放送している番組がいっぱいあった。普通話を教えている番組も大量に放送されていた。改革開放という政策は、経済の速い発展を促しながら、中国の社会を商業化するように仕向けさせてきた。人口の移動することは頻繁になり、違う地域の人々の交流は活躍してきた。それで、普通話はとても重要な交際工具になり、同時に普通話の良い学ぶ環境も創造された。ほかに、政府も1998年から毎年9月に「普通話推广週」を開催させ、教師や公務員は必ずある等級の普通話試験をパスすると規定するなど、いろんな工夫をした。2000年10月、『中華人民共和国国家通用语言文字法』を公布したことは、普通話を推し広める運動は、法律の形になった。²²2002年に発表した資料は、「調査によって、目前の大中型の都市に住んでいる人の中に、90%以上は自分または子供の普通話を学び、使うことを希望しており、80%以上は普通話での社会交際が行える。普通話は、もう全国通用の言語になり、わが国の方言と言語の蟠りはどんどん消えてきている。」と述べている。²³ただし、これは都市の状況だけであり、農村の状況は含まれていないのである。だけど、1978年からの普通話を推し広めることは、以前より大きいな成績を得たに違いないであろう。

しかし、また問題が起こった。共産党に統治されている中国社会は、「汎行政化」という社会である。普通話を推し広めることの最高な主管する機構は、教育部であり、地方のそういうことは、教育部の下役として地方の教育機関の任務である。つまり、普通話の広めることを担当するのは、全国の教育系統である。中国の一般的な状況によって、ある系統の公務員の別の

系統へ転職することはあまりなく、ただ本系統のなかで成績を取って昇進するのが望める。それで、成績のために、普通話を普及することは、普通話で方言を代わることになり、地方の人たちの互いに方言で話し合うことも批判されてきた。2002年、湖南省は、「8年内湘音を消滅してしまう。」という目標を公布した。これは、一つの例である。²⁴

自分の方言は消える危機を直面していると、部分の中国人は感じてきた。だから、自分の方言が守りたい、さらに自分の文化の特色が守りたいので、普通話へのある程度の反発が起こった。中国の新聞やテレビ局などはぜんぶ政府が待っているのだから、普通話を反対する見解は、たいていインターネットで発表しており、実際の影響力があまりない。

普通話への反対する見解の中に、呉語方言区を中心としての上海と粵語方言区を中心としての広州からの、特別に強い。この二つは、いまの中国の最も発達した都市であり、昔から北京とずいぶん違う文化を持ってきた。反対する見解を持っている人は、北京方言は政治中心の力に頼り、別の方言を取り替えるのは道理でないと思っており、自分の方言を守る望みはとても強烈である。北京方言は、別の民族の言語に深く影響された新しい方言であるのだから、漢族の民族共通語としての資格がないという批判もある。20年余り以来、政府からの普通話についての宣伝と教育がとても力強かったのだから、もちろん、普通話の推し広めることを同意している見解を持っている人は反対している人よりずっと多い。そんな人たちは、しばしば普通話を反対している人を「分裂主義者」と呼び、伝統的な中国人の観念によって、これはとても重大な罪名である。呉語と粵語方言は、普通話としての北京方言と同じように、漢語の一部であるが、自分の方言が守りたい人も民族への強い愛着を持っているに違いないけれども、「分裂」という罪名を得たのは、深い意味があるであろう。

五、結びに代える

いまの中国の文化発展は、政府からの影響が強いので、未来の情況は、とても不明である。56の民族によって構成された国家を統治している共産党にとって、政権を固めるため、民族の差異を取り除き、「多元一体の中華民族」という民族を作るのは、当然な手段であろう。民族の一体化のために、文化は一体化にならなければならないのである。人口において圧倒的な優勢を持っている漢族も、ほかの「少数民族」と呼ばれている55の民族も、例外ではない。しかし、人間にとって、自分の文化が守りたいのは、自然な感情である。言語は、文化のとても重要な一部なので、これから、普通話を推し広めることは、どんな歩き方で発展するのか、漢族の文化にどんな影響を与えるのか、いまははっきり言えないものだろう。

註：

- ① 上野駅には、この短歌が刻まれている碑がある。
- ② 日本で「漢文」として知られている古漢語の文章語である。
- ③ いまもう漢族化してしまった。
- ④ いま、一部は漢族化してしまい、一部は黎族になったしまった。
- ⑤ [清] 施鸿保・『闽杂记』・「谕闽广正乡音」(『闽小纪·闽杂记』, 来新夏校点, 福建人民出版社, 1985, P41-P42「正音書院」条)による。
- ⑥ 総督と巡撫, 当時の省と最高官員であった。
- ⑦ 当時の教育担当する官員であった。
- ⑧ 同！。
- ⑨ 現在の深圳市。
- ⑩ 『钦定学堂章程』の付属文書である『奏定高等小学章程』：“习官话者即以读《圣谕广训》直解习之, 其文皆系京师语, 每星期一次即可。(官話を勉強とは、[『聖諭広訓』]を読むことで直接的に習い, [『聖諭広訓』]はすべて北京語で書き, [習うことは]週に一回でいい。)”
- ⑪ 同上の文書による。

⑫ 北京音を基準にしながらも、濁声母(濁子音)を含み、入声字に特別の声調を与えたため声調が5個(現代の普通話では4個)になるなど、南方系諸方言に妥協した読音が決定された。

⑬ 『推行国語以期言文一致案』：“改国文为语体文。(国文は語体文に改める。)”、『国民学校令』：“首宜教授注音字母, 正其發音。(まずは注音字母を教えることであり, 学生の發音を直すことを目指す。)”

⑭ 余秋雨『郷関何処』：“我到上海是为了考中学。……余姚虽然离上海不远, 但余姚话和上海话差别极大, 我相信一个纯粹讲余姚话的人在上海街头一定是步履维艰的。……到了上海, 几乎无法用语言与四周沟通, 成天郁郁寡欢……最伤心的是我上中学的第一天, 老师不知怎么偏偏要我站起来回答问题。我红着脸憋了好一会儿终于把满口的余姚话倾泻而出, 我相信当时一定把老师和全班同学都搞糊涂了, 完全不知道我在说什么。”

⑮ 1985年から余姚市になった。

⑯ [清] 施鸿保・『闽杂记』・「谕闽广正乡音」(『闽小纪·闽杂记』, 来新夏校点, 福建人民出版社, 1985, P41-P42「正音書院」条)による。

⑰ “文字必须改革, 要走世界文字共同的拼音方向。”(劉勇・高化民編著『大論争—建国以来需要論争実録』珠海出版社, 2001)

⑱ 「……语言是交际的工具, 也是社会斗争和发展的工具。……由于历史的原因, 汉语的发展现在还没有达到完全统一的地步。许多严重分歧的方言妨碍了不同地区的人们的交谈, 造成社会主义建设事业中的许多不便。……为了我国政治, 经济, 文化和国防的进一步发展的利益, 必须有效地消除这些现象。」中華人民共和国教育部語言文字应用研究所のホームページからの『國務院關於推廣普通話的指示』により。

3 中華人民共和国教育部語言文字应用研究所のホームページにより。

4 同上

21 『關於加強學校普通話和漢語拼音教學的通知』, 中華人民共和国教育部語言文字应用研究

所のホームページにより。

22 中国語：「請講普通話。」

23 中華人民共和国教育部のホームページにより。

24 「据调查，目前大中城市90%以上的人希望自己或自己的子女学习，使用普通话，80%的人能够使用普通话进行社会交际。普通话已经成为全国通用的语言，我国的方言和语言隔阂正在逐渐消除。」中華人民共和国教育部語言文字應用管理司のホームページにより。

25 中国の一番重要な新聞「人民日報」のホームページに掲載したニュースにより。「湘」は、

湖南省の略称である。

文献：

游汝傑 一九九二 『漢語方言学概論』上海教育出版社

李新魁 一九九四 『広東的方言』広東人民出版社

周振鶴 一九八六 『方言与中国文化』上海人民出版社

Benedict Anderson・白石さや・白石隆訳 一九九七『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT出版

新刊紹介

岩田重則著

『戦死者靈魂のゆくえ』・『墓の民俗学』

2003年に立て続けに刊行された両書は、祖先祭祀という共通した問題が扱われている。『戦死者靈魂のゆくえ』では柳田國男の『先祖の話』における祖霊信仰学説を検証し、戦死者供養と戦時下の流行神を取り上げ、戦時下の人々が求めた精神を論じている。戦死者供養の問題は国立歴史民俗博物館の研究報告書をはじめとして、近年注目されている問題であり、「流行」とも言える。しかし、著者の問題意識は決して「流行」の戦死者供養にあるわけではない。最終年忌墓塔の評価、墓制研究における霊肉分離の問題、仏教民俗学的視点の再評価など、あくまでも民俗学における祖霊信仰学説にあり、資料に基づいた実証的な研究にある。『墓の民俗学』は、そうした著者の姿勢が明確に現れており、墓上施設論、最終年忌塔

婆論、位牌論を通じて、祖先祭祀が総合的に論じられている。両書に通底するのは著者による緻密なフィールドワークと、執拗なまでの資料の探求である。両書はそうした着実な資料の地道な積み重ねにより構築されている。著者は『墓の民俗学』の後書きで、近年における学問の「流行」や「批評的文章」について疑問を呈し、「基本的研究こそが現代民俗学ではないか」と記している。緻密なフィールドワークと資料収集から立論するという民俗学における基本と魅力を与えてくれる。一読を勧めたい。

(宮内貫久)

『戦死者靈魂のゆくえ』 208頁 2003年4月刊 吉川弘文館 定価2400円

『墓の民俗学』 328頁 2003年12月刊 吉川弘文館 定価8500円